

令和4年1月30日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 江 山

学位論文題目

地域社会における戦争記憶の形成と継承－鹿児島県の事例を中心に－
(Formation and Inheritance of War Memories in the Local Communities : Focusing
on the Case of Kagoshima Prefecture)

最終試験の概要

学位(博士)論文に関する最終試験を令和4年1月8日に行った。最初に江氏により提出論文の概要についての説明がなされ、その後、試験委員との間で質疑応答がなされた。

試験委員からは、本論文の学術的な位置づけについて、先行研究への目配りも行き届いており、先行研究の整理を踏まえ方法論上の問題についても明確な記述がなされているが、こうした序論で提示された課題や論点が、実際の分析や結論において必ずしも十分に活かされていないのではないか、との指摘がなされた。たとえば、本論文はアルバックスの「集合的記憶」論を方法論の中心に置いているが、本論文の分析を通して、どのような「集合的記憶」の形成と特徴が指摘できるのか、説明を求められた。これに対して江氏からは、鹿児島県における各民間団体の集団による戦争の再解釈のプロセスを「集合的記憶」の事例と提示した、との回答がなされた。ただし、そうした「集合的記憶」が有する特徴についてはさらに掘り下げる必要があり、今後の課題としたいと述べられた。

また、本論文では、ナショナルなレベルでの戦争記憶に対してローカルなレベルでの戦争記憶の形成を取り上げている点に研究上の意義があると考えられるが、2つのレベルを二者択一的に捉えており、ローカルなレベルでの戦争記憶においてもナショナリズム

ムに回収される可能性はあり、この点についての考察が必要ではないか、との指摘がなされた。江氏からは、確かにローカルなレベルでの戦争記憶も多様性があり、取り上げた事例の中でも特攻慰霊祭のような事例を取り上げることにより説明したつもりであるが、ナショナリズムの問題との関連性を明確化できてはいなかったとの説明がなされた。また、本論文で地域社会における多くの民間レベルにおける戦争記憶に関わる活動を取り上げているのは、もっぱら公的な戦争記憶しか存在しない母国・中国との対比という問題意識に発するものであり、民間団体の様々な活動の内容とその性格を丹念に明らかにすることが本論文を支える問題関心の一つであると述べられた。

以上の点以外にも、知覧の特攻記念館の扱い、集合的記憶と集合的忘却の関連、掲載写真と論文との整合性など、種々質問・指摘があり、それらの質問・指摘について江氏からの回答がなされた。

江氏との質疑応答を終え、試験委員による協議を行った。論文で設定した分析視角や方法論が分析において必ずしも活かされていない部分があること、結論部分での踏み込みが不足している点などの問題を指摘できるが、先行研究を広範囲に丹念に整理したうえで、文献資料のみならず参与観察や当事者へのインタビューなど精力的な調査を踏まえ優れた事例分析を行っていること、また、分析内容に対する質問にも適切に回答し、さらに試験委員からの意見を率直に受け止め、自身の研究課題として主体的に考えようとしている点が評価された。

以上により、江氏の論文は、学位(博士)を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 合

試験委員

主査 (氏名) 平井 一臣

副査 (氏名) 城戸 秀之

副査 (氏名) 竹岡 健一

副査 (氏名) 井手 富雄